

# 謎の鍵穴

野村胡堂

## 一

「八、目黒の兼吉親分が来ていなさるそうだ。ちよいと挨拶をして来るから、これで勘定を払って置いてくれ」

銭形の平次は、子分の八五郎に紙入れを預けて、そのまま向うの離屋はなれへ行ってしまいました。

目黒の栗飯屋くりめしや、時分時で、不動様詣りの客が相当立て混んでおります。

「姐さん、勘定だよ。何？ 百二十文。酒が一本付いているぜ、それも承知か。廉やすいや、こりや」

ガラツ八は自分の懐ふところ見たいな顔をして、鷹揚おうように勘定をすると、  
若干なにがしか心付けを置いて、さて妻楊枝つまようじを取上げました。

ぬるい茶が一杯。

景色を見るんだって、資本もとをかけると何となく心持が違います。

「ちよいと、伺いますが、あの銭形の親分さんは？」

優しい声、耳に近々と囁くように訊かれて、ガラツ八は振り返りました。  
はたち  
おおだな  
二十前後の大店の若女房といった女が、少し顔を赧からめて、尋常に小腰を屈かがめるのでした。

「親分は向うへ行ってるが、何んだい、用事てえのは？」

「あの、銭形の親分さんのところの、八五郎さんと言うのはあな、  
たで——」

「よく知っているな、八五郎は俺だ」

「確かに八五郎親分さんで——」

「八五郎親分てえほどの貫禄かんろくじゃねえが、銭形の親分のところ  
いる八五郎なら、俺に違いねえ。本人が言うんだからこれほど確  
かなことはあるまい」

ガラッ八は古風な洒落しゃれを言つて、長なんがい顎を撫でました。

「それじゃこれを、そつと銭形の親分さんへお手渡し下さいませ

んか」

八五郎に握らせたのは、半紙半枚ほどの小さく畳んだ結び文。

「あッ、待ちねえ。親分と来た日には江戸一番の堅造かたぞうだ。こんな

もの取次ぐと、俺は殴り倒されるぜ」

追っかける八五郎の手をスリと抜けて、女は店口から往来の人混みの中へ、大きな蝶々ちょうちょうのように身を隠してしまいました。

「冗談じゃねえ、岡っ引へ付け文する奴もねえもんだ。これだから当節の女は嫌いさ」

ガラッ八はでっかい舌鼓したづつみを一つ、四方あたりを見廻しましたが、さて、

その結び文を捨てる場所もありません。

「ままよ、どうとも勝手になれ」

幸い平次から預った羅紗らしやの紙入れ、それへポンと投げ込んで、素知らぬ顔をすることに決めてしまいました。これなら結び文は完全に平次の手には入りませんが、自分は知らぬ存ぜぬで通せば、余計な橋渡しをした罪だけは免まぬれます。もつとも、平次の女房のお静には少し済まないような気がしないではありませんが、少々位良心がチクチクしたところで、そんな事に屈託する八五郎でもなかつたのでした。

「どりゃ帰ろうか」

平次は離屋から帰って来ました。

「へエ紙入れ。勘定は百二十文、あんまり安いから受取も中へ入れて置きましたよ」

「栗飯の受取なんざ、禁呪まじないにもなるめえ」

庭石をトンと踏んで、傾きかけた西陽を浴びると、成程女に付文をされるだけあって平次はまだまだ若くて好い男であります。

「何をニヤニヤしているんだ。帰ろうぜ」

「へエ——、姐御がさぞ気が揉もめるだろうな」

「何だと」

「なに、こつちのことで」

二人は肩を並べて、神田へ向いました。

その頃ガラツ八は、向う柳原の叔母の家に泊り込んでおりました。無人で困るからと言う叔母の願いを叶えてやるつもりで八五郎。

何時までも独りじゃあるまいから、嫁を持たせる支度に、夜の物や、折々の着物も一と通り揃えさせてやりたいというのが叔母の下心だったのです。

その日ガラツ八の八五郎が平次のところで、遅い晩飯を済ませ

て、フラリと柳原土手を帰って来たのは戌刻過ぎ、人通りのハタと絶えたところへ来ると、いきなり闇の中から飛出して、ドカンと突き当たったものがあります。

「気を付けろ、間抜け奴」

一人前の啖呵たんかを浴びせて、黙って飛んで行く男の後ろ姿を見ると、後からもう一人。

「あッ」

と立直るところを、足をさらわれて、さすがの八五郎、真まつ逆さか様に引くり返ってしまいました。

「な、何しあがるんでえ、怨うらみがあるなら名乗って来い。金なんざ、



百も持つちやいねえぞ」

と言ったが追付きません。相手は恐ろしく強いのはかり二人。ガラツ八も力づくでは滅多に人に引けを取りませんが、こんなに腕っ節の強いのに揃って来られては、全くどうすることも出来なかつたのです。

「――」

三人の相手は、唾おしの如く黙りこくって、ガラツ八の懐から袂まげぶしの中ふんどしから、禪まげぶしの三つまで捜しました。

「くすぐってえや、野郎、何が望みで人の身体を捜さがすんだ。臍へそなんか摘むと噛みついてやるぞ、畜生ッ」

口だけは達者に動きますが、非凡の腕力揃いに、両手と首を押えられての作業では、ガラツ八の武力も全く用いようがなかったのです。

これが素人衆だと、大きい声を出して自身番を呼ぶとか、往来の人に駆けて来て貰う術てもあつたでしょうが、十手捕縄を預かる身で、素姓も知れない者に、往来で手籠にされるのを見られたくありません。

「ない」

「人が来た」

「引揚げよう」

小さい声で囁き交した三人、ガラツ八を土手の上から突き転がすと、そのまま後をも見ずに三方へ。これは実に心得たやり口でした。ガラツ八が三人のうちどれを追っ駆けようと、暫く躊躇ちゆうちゆうするうちに一人残らず町の闇に解け込んでしまったのです。

いやそれどころではありません。土手から川へ転がされて柳の根っこに獅噛しがみ付かなかつたら、危うく土左衛門になるところだったのですから、三人の曲者を追っかけるどころの沙汰ではなかつたのです。

立上がつて懐を探ると幸い十手は無事。

「畜生ッ」

鬚ほげの刷毛先を直して、肩から裾ほこりの埃を払うと、ガラツ八はもう歩き出しております。懐中の十手さえ無事なら、多勢に無勢、袋叩きにされても致し方がないといった達観した気持になつていたのでした。

三

翌る日、ガラツ八のところへ大変な者が押し掛けて来ました。

「小母さん、八さんたのも在らっしゃる？ あらそう、まだ寝ているなんて頼母たのもしいわねえ」

二十五六、この時代の相場では大年増ですが、洗い髪を無造作に束ねて、白粉っ気なしの素裕すあわせ、色の白さも、唇の紅さも艶めきなまますが、それにも増して、くねくねと品しなを作る骨細の身体と、露つゆを含んだふくような、少し低い声が、この女の縹緞きりよう以上に人を悩ませます。

「お前さんは？」

叔母は少し遠い眼を見張りました。

「お吉よ。あら、忘れなすつたの。心細いわねえ、八さんの許嫁いいなづけ

じゃありませんか、ホ、ホ、ホ」

「まア、呆れた。私にはそんな素振りも見せないんだよ、あの子

は」

叔母は少し涙含なみだぐんでさえおります。二階で大いびきを掻いて寝ているあの子の八五郎は、角の乾物屋の二番目娘でも貰ってやろうと思う、自分の計画を裏切ったばかりでなく、こんなどこの山犬とも知れない不潔ふけつそうな女が、ノメノメと押掛けて来たのが、腹が立ってたまらなかつたのです。

「小母さん、二階へ行って宜いでしょう。どうせこれから先、ズツとここにいる心算りよ、可愛がって下さるわねえ」

「――」

呆れ果てた叔母の口へ埃ほこりを落して、お吉と名乗る女は二階へ

登ってしまいました。

「あら、本当に寝ているよ、この人は」

お吉は八五郎の枕元へ、浮世絵うきよえの遊女のように、ペタリと坐りながら、片手はもうその夜具の襟に掛けて、精一杯の媚態しなを作りながらゆすぶっておりました。いや、八五郎をゆすぶったと言うよりは、八五郎の夜具へ手を置いて、自分の身体を揺って見せたと言う方が適當だったでしょう。

「ちよいと、起きて下さいな。私が来て上げたのに、寝ているって法はないワ。鼻から提灯なんか出してさ、狸ならもう少し綺麗事にするものよ、——もう辰刻いっつ過ぎじゃないの、ちよいと八さん

てば」

何と言う悩ましき、窓から入る秋の朝陽が、暫らくカツと赤くなつたほどの情景です。

「うるさいな、もう少し寝かしてくれ」

くるりと寝返りを打った八五郎。

「あら」

枕の下に入れた財布がはみ出したのを見ると、女はそつと引出して中を調べました。

「まア、ちよいと、大の男がこんな財布を持って歩くの。良い胆つ玉ね、びたせん鏝銭まで入れて六十四文、ホ、ホ、ホ、ホ、だから八さん



は可愛いのです」

女はそんな事を言いながら、長火鉢の側ににじり寄って、上から順々に抽斗を開けて見ました。それから、手箱、押入れと、覗いて廻るのを、この時はもうすっかり眼の覚めた八五郎は、夜具の袖から眼ばかり出して、世にも怪奇なものを見るように覗いているのでした。

謎の鍵穴



©2017 萩 柚月

「八さん、世帯道具はこれつきりかえ」

女は又元のところへ来てぺタリと坐りました。例の悩ましき  
姿態<sup>ポーズ</sup>。

「お前は誰だい、何だつて人の家へ入つて来るんだ」

起き上がつて、寝巻の胸をカキ合せると、長い顔を引締めて少  
し屹<sup>きつ</sup>となります。

「あら、忘れちゃいやだよ、夫婦約束までしたお古じゃないか。

よく気を落着けて御覧よ、私の顔を見忘れる筈はないじゃないか」

「な、何だと？」

「なんて怖い顔をするんだらう。だけどさ、不断お前さんは優し

いから、そう屹きつとなつたところも、飛んだ立派よ。頼母しいつたらないんだよ、ウフ」

女は身を翻かえすと、掛け香こうを三十もブラ下げたような妖あやしく、艶めかしい香気を発散させて、八五郎の膝へ存分に身を投げかけるのでした。

「わッ、何をしやがるんだ。俺は女が嫌いだよ。ことにお前のようなのは、見ただけでも、虫唾むしずが走る」

「何を言うのさ、この間は一緒になつてくれって、お前さんの方から泣いて口説くどいたじゃないか」

「冗談も休み休み言えッ。それともお茶番の稽古なら、又日を改

めてお願いしようじゃないか。馬鹿馬鹿しい」

しかしこの勝負は完全に八五郎の負けでした。どうしても一緒になると言う女を突き飛ばして、ろくに顔も洗わず、昨夜の泥の付いた袴を引掛けたまま飛出したのは、それから四半刻ばかり後のことですが、八五郎は骨の髄ずいまで女臭くなつたような気がして、神田川へ飛込んで洗おうか——と言つた、途方もない衝動にかられながら、銭形平次の家へ、一目散に駆けて行つたのでした。ガラッ八の八五郎、自慢ではないが、これが臍へその緒切つて以来の女難だったのです。

#### 四

「親分、こんなわけで、馬鹿馬鹿しくて人様に話が出来ないが、深いわけがありそうだから、このまま隠して置けません」

ガラツ八は昨夜からの一伍ぶしじゅう一什を打明けて、親分の平次の知恵を借りました。

「そいつは面白そうだ、手前てめえ幾つだ」

平次は大真面目にこんな事を言います。

「三十になったばかりで」

「勘平さんと同じ年か、それで女が出来ないって法はあるまい。」

そのお吉とか言うのも、どこかでからかったんじゃないか。よく思い出して見るが宜い」

「飛んでもねえ、親分。この八五郎が、女にからかって忘れるか忘れねえか」

「まア、そうムキになつて怒るな。お前に覚えがなきゃア、これは話が面白くなりそうだ。何か大事なもの——どうせ金目のものじゃあるまいが、——人様から預るか何かして持つちやいないか」

「大した品じゃありませんが、たった一つ心当りがあります」

ガラツ八は、目黒の栗飯屋で、おおだな大店の嫁といった若い美しい女

から——平次親分さんへ渡すようにと結び文を頼まれたことを

話しました。

「それそれ、それに決ったよ八。昨夜の柳原の暗討も、今日の押掛女房も、その結び文が欲しかったんだ、——何だつて又つまらねえ遠慮をして、俺に渡さなかつたんだ」

「親分の紙入れの中へソツと入れて置きましたよ」

「何、俺の紙入れに入れた。人の悪いことをしやがる」

平次は懐から紙入れを出して見ましたが、中には鼻紙と小遣が少々挟はさんであるだけ、結び文などは影も形もありません。

「おや、親分のところへも押掛け女房がやって来たんじゃないやありませんか」



ガラツ八は少しばかり溜飲りゅういんを下げました。

「そんな馬鹿なことがあるものか。お静、お静、紙入れの中に入っていた、結び文を知らないか」

平次は次の間へ声を掛けると、

「これでしようか」

お静は何の蟠わだかまりもなく、小さい結び文を封も切らずに手箱の中から出して持って来ました。

「それぞれ、気がきくのも好し悪しだ。紙入れの物を始末する時は、一応俺に訊いてからにしろ」

「ハイ」

お静は少し赧しつとくなりました。淡い嫉妬、、、をたしなめられたような気がしたのでしょう。それでも、結び文の封を解かなかつたのは、何という仕合せだったのでしょう。内気なお静は襷たすきの結び目をほぐしながら、そんな事を考えているのでした。

「どれどれ、八、お前もかかり合いだ、立ち会ってくれ」

平次は馴れたもので、半紙を二枚ほど持って来て、台の上へ並べると、その上でそつと結び文を解いて行きました。髪の毛一と筋砂一粒入っていても、見のがさないようにするためだったのです。

「おや？」

思っていた通り、畳んだのは半紙半枚、鋏はさみの切口まで判然はつきりわか  
りますが、中には何にも書いてはいません。

いや、大きい二重じゅうまる◎が一つ、肉太の二の字が一つ、もう一つ小  
さい二重◎が一つ、——こんな変哲もないものを描いてあるので  
す。

「これは何だい、一体」

裏返して見ましたが、それつきり何にもありません。

上の二重丸は少し大きくて径一寸ほど、その下一寸二三分離し  
て描いた二の字は几帳面な字角で、左の方だけ揃っているのも不  
思議ですが、上の棒が二分位、下の棒が三分位、一番下の二重丸

は二の字に直ぐ続いて、その直径二分五厘ほど。何べんくり返して眺めても、この三つの外には、点一つ見つからない、最上等の手紙です。

「何でしよう親分」

「判らないよ、——だけど、これが欲しさに、立派な御用聞を手籠ごめにしたり、廃すたり者らしくない年増が、押掛け嫁に来るところを見ると、余程の品には違いあるまい。こうしようじゃないか、八」

平次はお静を紙屋に走らせて、同じ程度の上質の半紙を買わせ、その一枚を半分に截きると、八五郎が托たくされた結び文と同じ絵を三つ、——念入りに真似たくせに、わざと少しずつ寸法を変えたの

を描きました。上の二重丸は少し小さく、直径八分位に、丸と二の字は二寸ばかり離して、二の字の足はそれぞれ五厘ほど長く描き、最後の二重丸はグツと大きく、径三分五厘ほどに書き上げたのです。

「八、これを持って帰れ、あわせ 袂たもとへ入れて行くんだ。そのお吉と  
言う女がまだいるんなら、きつと探し出して贗物と知らずに持つて帰るに違いない。そこを跟けて、巢を突き止めるんだ。これは  
余程大仕事かも知れないぜ、気を付けてやるが宜い」

八五郎は平次に言われた通り運びました。帰って来たのは夕景、お吉と言う女は、すっかり女房気取りで、叔母を手伝って晩飯の

支度などをしております。

「おや、八さん、お帰んなさい。大層な御機嫌ね」

「何を言やがる」

八五郎はツイ痛烈つうれつに浴びせかけましたが、思い返して、着ていた袷あはせを脱ぎ捨てると、少し薄寒うすかぜそうな浴衣を引かけて、手拭てぬぐいいを片手にプイと飛出しました。

「あら、銭湯へ行くのかい、一本つけて待ってますよ」

追っ駆けるようにお吉の声。ガラツ八は舌鼓したづつみを一つ、大急ぎで、

路地を出ると、天水桶の蔭へ蝙蝠こうもりのようにピタリと身を隠しました。

お吉は八五郎の脱ぎ捨てた袷の袂から、贋物の結び文を捜し出して、続いてその後から飛出した事は言うまでもありません。

「ヘン、銭形の親分の見透しさ。お吉の阿魔あま、すっかり喜んで後ろを振り向いても見ねえ。もつとも、振り向かれちゃ大変だ」

八五郎はブラサゲた手拭を早速頬被りほおかぶにしました。ガラツ八相へんそうじゆつの変装術です。

女はそんな事も知らぬ様子で、賑やかなところを通るように、——白金へ辿り着いた時はもう亥刻よつ（十時）近い頃でしたでしょう。

## 五

「おや？」

六軒茶屋町から永峰町、ながみね行人坂を越して、ぎょうにんざかガラツ八は女の姿を見失ってしまったのです。

太鼓橋を渡って、中目黒の方へ、たんぼ田圃道を当もなく行くと、昨夜と違って良いお月様に照らされて、その辺の風物までが妙に感傷をそそります。

どこやらで——女の悲鳴。

駆け出したガラツ八は、ハタと躓つまずきました。



往來に崩折れているのは紛れもないお吉、抱き起すと、——  
あッ血、胸を一とえぐり、一とたまりもなく死んだ様子です。

早くも結び文に気の付いたガラツ八は、帯の間、袖、襟——など、凡そ女が物を隠しそうなところを残るくまなく捜しましたが、下手人に奪られたと見えて、その辺には影も形も見えません。

それからの騒ぎはどんなに大袈裟おおげさであつたにしても、この物語の筋とは関係のないことです。とにかく自身番まで死骸を運ばせて、町方役人立会で検屍けんしを済ませたのは夜中過ぎ、困つたことに、女の身元がどうしても解りません。

「錢形の親分ところの八兄哥あにいじゃないか、飛んだ事に掛りあつて、

さぞ迷惑だったろう」

遅れて飛んで来た目黒の兼吉——これは老巧な良い御用聞で、平次に楯たてを突いたり、八五郎をからかったりするような人柄ではありません。

「目黒の親分、これには深いわけがありそうですぜ。とにかく女の身元を洗あらって見て下さい」

八五郎も外に工夫はありません。

兼吉の子分は八方に飛びました。

女はやはりお吉と言うのが本名で、中目黒切つての物持ち、洒しゃ落れに両替もやると言った、近江屋七兵衛の番頭佐太郎が、人目を

はばか  
憚って、思い切り遠方に囲っている妾だったので。

近江屋の番頭佐太郎は、翌る日の昼前に縛られました。番所で引っ叩かないばかりに責めて見ましたが、知らぬ存ぜぬの一点張りで、筋の通ったことは一つも白状しません。

丁度その頃。

「親分、大変、近江屋の主人が死にましたぜ」  
兼吉の子分が、番所へ飛込んで来たのです。

「何？ 頓死か、怪我か」  
とんし

「それが怪しいんで――、昼飯の後で、大変な苦しきようだったというし、身体が斑まだらになって、舌も眼も引釣ったって言うから、

ことによればやられたのかも知れませんが」

「そいつは大変だ。八兄哥行って見るかい」

兼吉と八五郎は、宙を飛びました。岩屋の弁天前を通って、竜泉寺の門前、この辺は昔の方が繁昌したところで、近江屋も片手間ながら場所柄だけの商売はあったわけです。

店の内外はゴツタ返す騒ぎ、それをかきわけて入ると、奥は思いの外森しんとして、主人七兵衛の死体には、若い女房のお峯と奉公人の釜吉が附いているだけ――。

「おや」

もう一つ驚いたことは、七兵衛と言う年寄り臭い名を持って居

るのに、死んだ主人というのは、精々二十五六、一寸好い男ですが、死体は二た眼とは見られない虐むじたらしさです。

「あッ、お前さんは」

八五郎はもう一つ度胆どぎもを抜かれました。死体の側にいる女房のお峯というのは、ツイ二日前に、同じ目黒の栗飯屋で、親分の平次へ——と言つて、謎の結び文を渡した、あの美しい女だったのです。

「——」

お峯の訴える眼付き——邪念じゃねんなどは微塵もありそうのない、大きい悲しみと困惑とに悩まされた眼付き——を見ると、八五郎も

それを言い出す気にもなりません。

「これは、親分様方、——御苦労様で御座います」

下男とも、小使とも、にわは庭掃きとも、一人で兼ねている釜吉は、

五十男らしい実体さで挨拶しました。笑うとえびす恵比須様になる男ですが、さすが主人の死体を前にして、沈み切って愛想せがれつ気もありません。

先代七兵衛は十年ばかり前にこの土地へ来て、せがれ倅を育てて嫁を貰いましたが、本当の他国者で、嫁の里の外には、身寄りも友達もありません。

## 六

二つの死骸を繞めぐって、事件は恐ろしく複雑になりました。番頭  
の佐太郎は、商売上手な四十男で、人など害あやめそうもない人間で  
すが、お吉が殺された時分丁度店にいなかったのと、着物に血潮  
がベツトリ附いていたので、疑いを言い解く術もなかったのです。  
それに、近頃お吉の貪欲どんよくな追及を持って余して、切れたがって  
ると言った噂も、佐太郎には暗い影でした。全く佐太郎にとって、  
この二三年來のお吉は、重荷だったに相違ありません。このため、  
あっちこつちに借金を作っていることなども、調べが進むに従つ

て、追々に判つて来たことです。

主人の七兵衛は、本道ほんどう（内科医）が立会つて検屍の末、毒を盛られたと判りました。その毒は、昼頃食べた生菓子なまの餡あんの中に入っていたのではあるまいかと——言いますが、確かなことは判りません。七兵衛は茶が好きだったのと、朝から昼までの食物で、一人で食べたのは、その生菓子の外にはなかったといふところまで判つたのでした。

お茶の相手をしたのは女房のお峯ですが、それは金米糖こんべいとうか何かを一粒口に入れただけで、生菓子は食べなかつたと自分で言っております。七兵衛の死んだのは、佐太郎が番所へ引かれて一刻も



経つてからですから、疑いは当然嫁のお峯一人に掛つて来なければなりません。

兼吉がお峯も縛ると言い出したのは、決して無理なことではなかつたのでした。

「お願いですから、銭形の親分さんをお呼びして下さい」  
自分の身边が危うくなると、お峯はそつと八五郎にささやきま  
した。

「それじゃ訊くが、あの結び文は何だえ、それを言つて貰わな  
きゃア、御新造を庇かばいようはない」

八五郎の言葉は少し厳きびしく聞こえたのでしよう。

「私には何にも判りません、——主人が亡くなる二三日前から、  
どうも危ない、このまましているとどんな事になるか解らないから、  
これを預ってくれ、と私へ渡したのです。訊き返しても、何も言  
いませんでした」

お峯の言葉は意外でした。が、綺麗な小さい顔、わななく唇、  
一生懸命な瞳を見ていると、どんな不自然なことでも、ガラッ八  
は信じてやりたいような気になります。

「それから」

「あの日銭形の親分さんが不動様に参詣にいらしたと聴いて、  
私は一人で決めて飛んで行きました。主人はもうろく、な口もきか

ないほど心配していましたし、私はあの結び文を持っているのが怖くてならなかったのです」

「――」

「八五郎さんをお願いして、銭形の親分にお頼みしたと話すと、主人は、――そうか、仕方があるまい、あの符牒ふちようだけでは、見る人が見なければ判る道理がないから、――と申しておりました」

お峯の話はそれだけです。

間もなく兼吉がやって来て、縄は打ちませんが、お峯を番所まで伴って行ってしまいました。

が、町内の医者や、目黒から白金しろがね、麻布一円の生薬屋を調べさ

した子分が帰つてくると、兼吉のした事はすっかり引くり返されてしまいました。毒を手に入れようとして、医者や生薬屋に、いろいろ手を尽したのは、お峯ではなくて、却つて佐太郎だったことが判つたのです。

## 七

何日か無駄なんにちに過ぎました。

佐太郎はどんなに責めても、お吉殺しを白状せず、お峯の方も、夫殺しの嫌疑が段々薄くなるばかりです。

佐太郎の着物に着いていた血というのは、人を刺した時の返り血でなくて、刃物を拭った血の跡だと判りました。これは八五郎が指摘ししてきしたので、『銭形平次親分に注意されて来た』とはっきり断っております。成程そう言えば血潮は刃形に附いていて、自分で自分の着物あいくちで匕首あいくちを拭かなければ、こんな型が付く道理はありません。もつとも、お吉殺しの時の不在証明アリバイは持っていませんが、それには深い仔細のあることでしょう。

お峯かかに懸かかった夫殺しの疑いも、同じように段々薄れて行きます。夫婦の仲が雇人達うらやが羨むほど良く、それに、夫でも殺そうと言う悪心があるなら、江戸一番の捕物の名人に、謎のような結び文を

預けていらざる注意を喚び起す筈もありません。

もう一つ、生菓子へ入れた毒も、その時お峯が入れたとは限らないわけで、一刻も二刻も前に入れて置いても、七兵衛が喰うに決った菓子だったのです。

二人は許されて帰って来ましたが、そうかと言って、他に疑いをかける程の人があるわけではありません。

釜吉は実直一点張りの男、菓子もその日の朝七兵衛に頼まれて自分が赤坂から買って来たのですから、自分の手で毒を仕込むよきな馬鹿なことはする筈もなく、第一その菓子を誰が食うのか、よく知っている道理がなかったのです。

丁稚でっちの長六、下女のお咲、仲働きのお春、どれも一期半期の奉公人で、お吉や七兵衛を殺すほどの理由を持つようなのはありません。

「銭形の、——気の毒だが、兄哥も満更掛り合いがないわけでもあるまい。少し乗出して知恵を貸しちゃ貰えまいか」

兼吉がわざわざ神田までやって来たのは、それから七日も経った後でした。

「俺が出しゃ張っちゃ、兄哥に済まない。こうしよう、たった一つ心当りを言つて置くが、兄哥の手で調べて貰えまいか」

平次は遠慮深くこんなことを言います。

「どんな事だい、銭形の兄哥、こうなりや、どんな事でもやって見るが」

四十男の兼吉は、この稼業の者に似合わぬ、謙虚な、けんきよ人柄の男だったのです。

「近頃、あの家の者か、出入りの者で、鍵をこしらえさせた者はないだろうか、山ノ手一円の鍛冶屋かじや鑄掛屋いかけやを、ごく内証で調べて貰いたいんだが——」

「そんな事ならわけはない」

兼吉は大喜びで飛出しました。平次の註文は見当も付きませんが、何となく自信あり気で、これがむつかしい事件をほぐすたんしよ端緒



になりそうな気がしたのです。

が、それも全く無駄な努力でした。山ノ手の鍛冶屋鑄掛屋に、この十日ばかりの間に鍵を頼んだのは三十人もありますが、困ったことに、その中には近江屋の者は言うまでもなく、近江屋出入りの者も一人もなかったのです。

「どうだろう、錢形の」

二度目につながりして兼吉が来た時、平次は日頃にもなく悄しよげ気げて、

「成程これは悪かった。あれほどの曲者が、自分で鍵を註文に行く筈はない」

こんな事を言っております。

## 八

到頭平次は乗出しました。

目黒へ行く前、南の奉行所へ一寸顔を出して、書き役の遠藤  
佐仲さちゆうに逢い、

「丁度十年か十一年前に、何か飛んでもない物が盗まれて、それつきり、その品も現われず、盗人も知れないと云うような事は御座いませんか」

こんな事を訊ねます。

「左様、十年か十一年前という古いことだが、品物も盗人も現れないのは、大抵書き残してある筈だ、待ってくれ」

帳面をパラパラとめくって行った遠藤佐仲は、しばらく経って、会心の笑みを浮べました。

「ありましたか、旦那」

「あつたよ平次、——しかも三つだ」(編注)

「へエ——」

「一つは、えんしゅうはままつ遠州浜松で——」

「そんなのは要りません、江戸の近在のだけで沢山で」

「板橋の東景庵とうけいあんの薬師如来像やくしにょらいぞうが盗まれた。これは慶運作の御丈け四尺五寸という大した仏像だ。厨子ずしは金銀を鏤ちりばめ、仏体には、玉がはめ込んである、が十一年前の春盗まれて、未だに行方が知れない」

「それから」

「金座の後藤が、勘定奉行へ送って極印ごくいんを打って貰う、吹き立ての小判が六千両、常盤橋外ときわばしで、車ごと奪られた、その時人足が二人、役人が一人斬られたが、これもまた、品も下手人も、現われ  
ない」

「その小判には極印が打ってあるでしょうか」

「捺してない筈だ」

「通用出来ませんね」

「十年も経って、世間で忘れていているから、極印位はなくとも、今なら少々は通用するかも知れないよ、もつとも極印の贋にせを作れば、それつきりだ。お上でも知らないうちに、通用しているかも知れない」

遠藤佐仲まことに心得たことを言います。

「それだッ」

「あ、驚いた、何がそれだ」

「いえ、こつちの事で、どうも御手数を掛けました。有難う存じ

ます」

平次はその足で目黒へ——。

「目黒の兄哥、あにい大方見当が付いたぞ。今度の曲者は一と筋縄では行かないわけがある。何十人でも宜い、大急ぎで掻き集められるだけ人数を集めて貰いたい——」

兼吉を呼出して、そつと囁きます。

「宜いとも」

顔の良い兼吉は、即座に子分や謀者ちようじやを呼びました。一刻も経たないうちに、近江屋の庭に集まった人数はざつと三十人。

「有難い、これだけありやどんな狸でも逃しっこはねえ、型ばか

りの家探しをさせて、日が暮れたら一人残らず帰る振りをするんだ。もつともそつと引返して、塀の外から見張っていて貫いたいんだ」

「宜いとも」

二人は打合せると、

「サア、これから家探しだ。天井裏から、床下まで、目の届かない隈くまがあつちやならねえ。押入れも、戸棚も、奉公人の荷物も、皆んな探すんだ。目当ては、お吉を殺したあいくちヒ首と、主人を殺した毒薬だ、——他の物には目をかけるに及ばねえ」

平次が号令すると、三十人ばかりの人数、一斉に動き出して、

およそ気の長い家探しを始めました。

それが半日、日が暮れて、灯がなくては何にも見えなくなると、平次と兼吉は、つか疲れ果てた人数を庭へ集めて、

「どうも御苦勞、これだけ探して見当らなきやア、この家に隠して置かなかつたんだらう。一人残らず帰って休んでくれ」

兼吉に言われて、文句を言うわけにも行かず、銘々ふく脹れ返って店から、裏口から、暗くなつた下目黒の往来へ出て行きました。

## 九



「これで切上げだ。下手人は到頭解らないが、いずれ閻魔えんま様が見付けて下さるだろう。最後の思い出に、二人で見て廻るとしようか、目黒の兄哥」

平次はおつくうそうに立上がりました。

「無駄だろうよ、銭形の」

「無駄は解っているが念のためだ、——番頭さん、御新造さん、案内して貰いましょうか、釜吉も一緒に来てくれ、疑いのかからなかったのはお前ばかりだ、人徳があるんだね」

「御冗談を、親分」

釜吉は佐太郎とお峯の後に従いました。

平次は兼吉を先に立てて、店から始まって、納戸へ、居間へ、仏間へ、お勝手へ、雇人の部屋へ——と鍵のあるもの、錠前のあるものを一つ一つ覗いて行きます。

時々自分の袂から二三十束にした鍵を出して、いろいろ廻したり開けたり。

到頭手燭てしよくと提灯を点つけさせて、釜吉と八五郎に前後から照らさせながら、庭の方まで出かけて行きました。

庭の奥の林の中には、近所の百姓地で荒れ放題になっていたと言いう、稲荷いなり様の祠ほくらを移して、元のままながら小綺麗に祀ってあります。赤い鳥居が十基きばかり、その奥は一間四方ほどの堂があつ

て、格子の前には、元大きな拝殿の前にあつたという、幅三尺に長さ六尺、深さ三尺五寸もあろうと言う法外に大きな賽銭箱さいせんぼこがあります。

「これは大層欲張った賽銭箱だネ」

平次は笑いながら覗いて見ました。

げやき

櫂の厚板で組んだ、恐ろしく岩乗なもので、大一番の海老錠えびじょうを卸してありますが、覗いて見るとよく底が見えて、穴のあいた小銭が五六枚あるだけ、何の変哲もありません。

「――」

平次は小首を傾けましたが、その辺にあつた細い棒を持って来

て、賽銭箱の内と外の深さを測り、それから、自分の鍵束の中の大きい鍵を海老錠に持って行くと、錆さび付いて少しきしみますが、それでも手に従って廻って、錠はわけもなく外れます。格子になつた蓋を取って、箱を横にしようと思いましたか、これが恐ろしく重くて、一人の力ではどうしても動きません。

平次は箱の中に手を入れると、バラ銭をかき集めました。

「あッ」

そのバラ銭の一枚は糊で付けたもので、剥すとその下から、鍵穴が一つ出て来たのです。

平次は予期したことのように、その穴に同じ鍵を入れて廻すと、

底板は手に従ってボカリと取れ、その下から、目の覚めるような山吹色——。小判で六千両の大金が、提灯と手燭の灯を受けて燦然<sup>ぜん</sup>として眼を射たのです。

「これは何だ」

驚く兼吉。八五郎も佐太郎もお峯も、釜吉も、暫らくは息を吐くことさえ忘れたようでした。

「十年前、稲妻組<sup>いなずまぐみ</sup>と言った三人の泥棒が、常盤橋<sup>とぎわばし</sup>で金座の後藤から勘定奉行へ送り届ける六千両の小判を盗ったが、極印が打つてないので費うわけには行かなかつた、——それにしても、賽銭箱へ金を匿<sup>かく</sup>すという悪智恵には驚いたよ。賽銭箱は銭を入れる道具

だ。覗いて見るとバラ銭が少し底の方にある。竈へつついや仏壇に金を隠すなら誰でも気が付くが、賽銭箱までは思いも寄らない」

平次は一人で感心しております。

「その六千両を奪った泥棒は誰だ」

たまり兼ねて兼吉は口を挟みました。

「近江屋の先代七兵衛がその首領かしらだ。七兵衛が死ぬと、二代目の七兵衛は賽銭箱の鍵を預ったが、あと二人の仲間が脅おびやかすので、恐ろしくてかなわないので、そつと、鍵を捨てて、鍵の寸法だけ取って御新造に渡して置いた。御新造が八五郎に渡したのがその鍵の寸法だった」

「――」

「大きい二重丸は鍵の上の輪だ、これはあつてもなくても宜い。次の二の字は、鍵の一番大事な二本の足だ。左が揃っているのはそのためだ。下の二重丸は、鍵の軸じくの太さだ。俺も、これが鍵の寸法と解るまでには一日かかったよ」

「その鍵は親分」

とガラツ八は平次の持っている鍵を指します。

「近所の鑄掛屋いかけやに、寸法書通りのものを作らせたのだよ」

「出鱈目な、寸法を書いてお吉にやったのは？」

「曲者に一杯喰わせるためさ。曲者はお吉を使ってお前から寸法

書を取らせたが、お吉は昔の七兵衛の仲間の泥棒の娘だったので、もう一人、生き残った泥棒が殺してしまったのさ。お吉があんまりいろいろの事を知っていたのと浮気ッぽくて気が許されなかつたのだ」

「――」

平次の明察に、皆んな固唾かたずを呑むばかりです。

「曲者はお吉を殺した上、二代目の七兵衛まで殺した。生菓子へ入れた毒は、その辺の藪に沢山ある×××××だ。あれは味が解らない上、鳩毒ちんどくよりも利く」(編注)

「誰だい、その曲者は」



兼吉は我慢のならぬ声を出します。

「証拠から先に見せてやろう。先刻の家捜しやさいで、見付かつては大変と思つたのだらう、曲者は、俺が書いた偽寸法で拵えた鍵を自分の身体に持っている筈だ」

「野郎ッ、鍵を捨てたなッ」

八五郎は怒鳴つて、猛犬のように誰かへ飛付きました。恐ろしい必死の格闘が、ほんの暫らく続くと見るや、曲者くせものはガラッ八を虫のようにハネ飛ばして、高い塀へ飛付いたのです。

「馬鹿ッ、外には三十人もいる、神妙にせい」

平次が手から投げた銭は、塀の上の曲者の頬を打つと、曲者の

身体はそのまま下へ。

不意を喰らって、よろめくところへ、塀の外に伏せた人数は、折重なって縛り上げました。

曲者は、下男の釜吉。昔の稲妻組いなずまぐみの仲間であった。先代七兵衛のところへ潜り込んで時節を待つうちに、お吉の父親も七兵衛も死んで、ツイ六千両を一人占めにしようという気になったのでした。

番頭の佐太郎は何にも知らず。お吉は、佐太郎のお人好しに喰い下がって、釜吉と張合って、近江屋の内情を知ろうとしていたのです。

佐太郎はお吉が殺された時刻に、どこにいたか、言い開きの出来なかったのは、お峯に庭の闇に誘い出されて、何ということもない、若い女の神経を脅かす『恐怖』を聴かされていたのですが、世の誤解を懼れて、それを言わなかったままでのことでした。

(編注)

底本では「しかも二つだ」となっていますが、文脈の整合と、嶋中文庫版「銭形平次捕物控(三)」の記述を参考として、「しかも三つだ」に改めました。

底本の「×××××だ」と、伏字になっている部分は、嶋中文庫版「銭形平次捕物控(三)」では「トリカブトだ」となっていますが、底本のままとしました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現

が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和九年十一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第二卷 河出書房 昭和三十一年五

月三十一日初版

編集・発行 銭形倶楽部

謎の鍵穴



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>